

春島物語
窪田精



窪田 精●春島物語

昭和四十六年五月十日 発行

定価 五八〇円

著 者 窪 田 精

発 行 者 藤 山 真 人

発 行 所 株式会社 東 邦 出 版 社

東京都千代田区神田神保町二二二八

(倉本ビル内)

電話 東京(二六二)五七二五、七

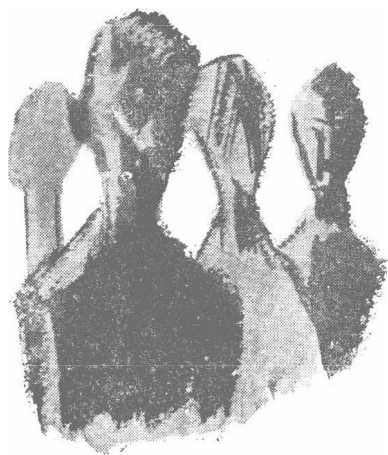
振替 東京八五二七五番

目次

はじめに	7
船の女	11
スクール	16
とかげ	21
温情主義	26
タコの木	30
夕焼け	34
南洋蛙	39
おとつさん	44
男ヤシ	48



星座	竹踊り	空襲	偵察機	特科隊	フジハラ屋	指導部	ヤシ蟹	青い海	図南座	外交屋	ケンカの死	赤トンボ
107	102	97	93	88	84	80	75	71	67	62	58	53



黒煙

凶南寺

「玉砕」待ち

夜のおと

破天荒

飢え

葦の道

あらし

タバコ

パイヤ

山の墓地

病舎

逃走者

111

115

120

124

128

133

137

142

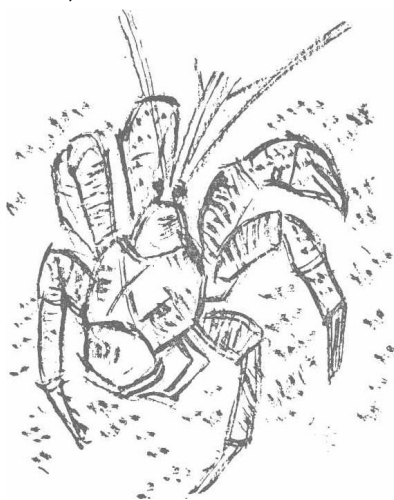
147

151

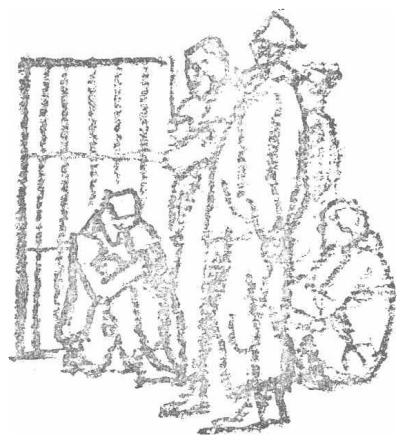
156

160

164

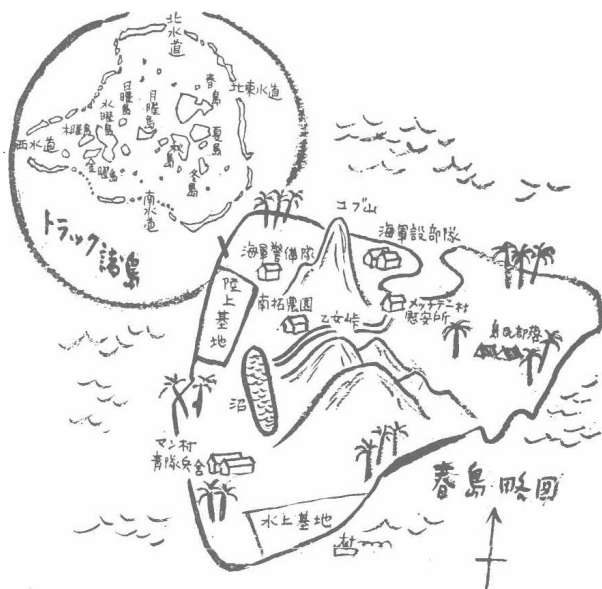


窪田精 年譜	225	帰国	219	静かな島	214	マレスケ	210	夏島	205	カシボク I	200	判任官	196	夜警	192	山の壕	187	花島	183	点鬼簿	178	銀めし屋	174	離島	169
-----------	-----	----	-----	------	-----	------	-----	----	-----	-----------	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	------	-----	----	-----



春
島
物
語

さ装
して
絵い
永
井
潔



はじめに

私たちが小学生のころ、たしか五年生のときの国語読本巻九に、「トラック島便り」というのがあった。叔父から松太郎殿という手紙のかたちで、ヤシやパンの木が茂り、毎日のようにスコールが樹木を洗って通りすぎてゆくというその島のことのことが語られていて、いかにものんびりとした平和な島という印象が強くてこっていた。

Y 県在の農家に生まれ、村の小学校に通っていた私は、後年になって自分がそんな南方の島に、しかも青い囚衣をつけた流刑囚として送られてゆくことになるなどとは、夢にも思わなかった。

太平洋戦争中、満で十九歳から二十四歳までの五年間を獄中ですごした私は、そのうちの四年ちかく——正確にいうならば三年八ヵ月を西南太平洋上の孤島、トラック島に送られて、一種の流刑生活をおくった。

トラツク島は横浜から南へ三千三百キロ、西南太平洋上、東カロリン諸島のなかにある。トラツク島とひと口に呼ばれているが、それは多くの無人島をふくむ数十の小島からなっていて、そのなかで比較的大きな島は、春島、夏島、秋島、冬島の四季諸島、日、月、火、水、木、金、土の七曜諸島、さらに竹島、楓島、芙蓉島などであり、また、これらの島々の周囲を、高さ二十八キロのほぼ三角形をなす環礁が、天然の防波堤のようにとりまいていて、島と島とのあいだの海はいつも波がおだやかで、湖水のようだった。それで絶好の港であった。環礁の四方には門のような「水道」があり、船はそこから出入した。

これらの島は一六八〇年代にスペイン人によって発見され、二百年にわたってスペインによる統治がつづいたが、一八八五年、米西戦争敗戦後の財政的窮乏のなかでスペイン政府はこれらの島をドイツに売却し、ドイツ領としての期間が約三十年つづいた。そして一九一四年、第一次世界大戦はつづいて、日本海軍によって占領され、それ以後はカロリン諸島ぜんたい、さらにマリアナ諸島、マーシャル諸島とともに、日本政府の委任統治領と

されていた。

トラツク島を軍事基地化し、南太平洋での連合艦隊の前進基地にしようとした日本海軍は、一九四一年十一月（太平洋戦争のはじまるひと月まえ）当時の司法省刑務局の協力のもとに、すでにマリアナ諸島のデニアン島の飛行場を完成した囚人——外役隊の一部、約二百名をトラツク島に移送して、春島に上陸させた。これが先発隊で、翌四二年二月、日本本土の刑務所からあつめた約五百名の囚人を乗せた第二船を入港させた。つづいて三月に第三船が入港した。それまで関西のK刑務所にいた私は、この第三船でトラツク島に送られたのだった。

トラツク島で囚人の外役隊がいたのは春島だけであつた。トラツク島のなかで春島は、水曜島について二ばん目に大きい島で——といっても面積は二十二平方キロ、つまり四・七キロ四方ほどの小島であつた。島の中央は北から南へかけて、かなりけわしい山になっていて、尾根がいりくんで海岸に迫っていた。海のほうからみると、高さ三、四百メートルの新緑の小山を、そのまま運んできて海に浮かべたような感じの島だった。しかし山をとりまくように、海岸線にそって平地もあつた。それらの

平地も山の尾根も、パンの木やマンゴーの巨木がいりまじってうっそうとしているヤシ林か、名の知れぬ熱帯樹やつる草が縦横にからみあっているジャングルだった。

島中歩いてみても川はほとんどみあたらず、ところどころに青い水草の浮いている沼や湿地があり、島民の常食となっているタロ芋が、ハスの葉に似た雨がさ大ほどもあるまるい葉をたれて、にょきにょきと生えていた。赤い仏桑華や印度素香の白い花が咲き乱れ、紅雀が群れていた。

日本海軍はこの島に二つの飛行場をつくる計画で、島の北端にあるコブ山（尾根の中腹にラクダの背のような突起があったので、そう呼ばれていた）の下に陸上基地と、島の南端の水上市地と、二カ所で工事はじまったばかりであった。まだ米軍機の空襲はなく、囚人たちの仕事はヤシ林やジャングルを伐採し、コブ山の一部をくずして、土をトロツコで運び、整地をおこなって滑走路をつくることだった。

私たちの身分は、横浜刑務所南方支所の受刑者——外役隊であったが、島では、夏島に本部のあった海軍の設部隊の指揮下にはいり、司法省から派遣されているTと

いう典獄の名をとって、海軍設部隊司法省T部隊と呼ばれていた。一千数百名の囚人は五個中隊にわけられ、さらに小隊、分隊というふうに、軍隊式の編成になっていた。看守長が中隊長で、看守部長が小隊長、看守が分隊長だった。そして私たちは「兵隊」と呼ばれていた。しかし兵隊は夕方になり、毎日の労役からあがってゆくと、戒護の看守の「検身」があり、タバコの吸いがらでもかくし持っていようものなら「半殺し」であった。夜は木格子と、錠前のぶらさがっている「兵舎」で眠り、泥色によごれたシャツやモモヒキ、フンドシ、戦闘帽にいたるまで青い囚衣のそれであった。それで島の人々は、私たちのことを青隊と呼んだ。

島には、島の人口の多数をしめる青隊のほかに、少数の海軍警備隊と、五、六百名の海軍設部隊の軍夫がいた。さらに島にいる日本人といえば、コブ山の山すそで、きゅうりや甘藷などをつくって海軍に納入している南拓（南洋拓殖会社）の農園の農耕夫、島民公学校の中年の教員夫婦、駐在所の巡査、島の北端の陸上基地の裏のほう——メツチデー村に開設されている警備隊や設部隊の軍夫たち相手の海軍の慰安所の女たちぐらいのものであつ

た。

それからカナカ族の島民がいたが、かれらは海軍の命令で山の反対側——島の東海岸のほうに移住させられ、ニッパ・ヤシの小屋をつくって住んでいて、週一回の「魚獲り」の日以外には、めったに私たちのまえに姿をみせなかった。

青隊の「兵舎」は、島の西海岸の元島民部落マン村のヤシ林のなかにあった。木格子の高窓のついたトタン屋根の木造長方形の建物が、北舎、南舎と二ヶ所にわかれ、各四棟ずつ計八棟がならんでいた。土方の飯場小屋のようなバラックで、一棟が二室に区切られ、五十坪ほどの一室に八十人ぐらいの雑居であった。

私たちは朝六時に起床すると、島の西海岸から島の北端の陸上基地につづく朝つゆの道を踏んで現場に通った。道の片側は一面のヤシ林やジャングルで、反対側は食塩をひきつめたような真っ白い珊瑚礁の砂浜が青い海につづいていた。陸上基地までは二キロほどの道のりで、白地に赤いすじのはいった中隊旗を先頭にして、分隊順にならんで、長い列をつくって行進歌をうたいながらすすんでゆくのであった。

看守たちは草色のヘルメット帽に半袖半ズボンの防暑服、ゲートルに地下たびという服装で、列の左右についていた。看守たちは腰に短剣をつり、かしの木刀を手ににぎっていた。

青隊のほとんどは刑期四、五年以上の長期囚で、年齢は二十代から五十代まで、さまざまな罪名のものがまじっていた。もっとも多いのはぜんたいの六、七割をしめる窃盗犯で（本土の刑務所でもおなじであったが）大部分は前科五犯六犯という累犯者であった。それから詐欺や強盗、傷害や殺人、戦時下の経済犯や少数の思想犯もまじっていた。

私はある政治的な背景をもった事件で入獄し、懲役八年刑をすでに二年ちかくつとめていた。そのとき二十一歳になっていた。

おおぜいの窃盗犯も、強盗犯や殺人犯もいっしょにくらしていると、ふつうの人間と変わりなかった。いかにもこうかつで凶悪な「犯人」らしい人間というのはすくなく、ほとんどは無知で単純で、むしろ木訥な感じのする男が多かった。それらの男らの顔と、背負ってきているその「罪名」とを、私は頭のなかでひきくらべて、どう

してこんな男がそんな罪を犯したのだろうか——と、しばしば考えこんだものである。累犯者の多くは、もうそこを住みなれたわが家のように、ごく自然にくらしていた。いつもおどおどしているのは、たいてい強盗犯や殺人犯で、それは初犯者が多かった。ふしぎなことに強盗犯には底ぬけのお人好しが多く、傷害犯や殺人犯はすぐムキになって泣いたりする「純情男」が多かった。

千名からの窃盗犯がいっしょにくらしているながら、仲間の物がなくなるということはほとんどなかった。ここではみんな衣食住が平等で、身分上の差別もなく、かれらが社会でうかがうような「腹の立つ、ぜいたくな家」(どういう家をねらうのかと私がたずねたとき、窃盗犯の多くはそう答えたのだ)などもなかったせいもあるのだろう。かれらは一人ひとりみるならば利己主義者が多いようであったが、看守たちや刑務所側にたいするときは、仲間をかばいあい、すぐに団結した。それはとくに指導者がいて、その周囲に団結するといったものではなく、一人ひとりでは弱い自分の立場を意識していて、人をかばえば、自分もかばってもらえる——という単純な、自己防衛の本能からくるもののようにだった。だから看守

たちにたいする通謀者、仲間への「裏切り者」などになんては、ようしゃのない制裁が加えられたりした。

かれらのなかで一番年齢も若く、からだも華奢で、いつも本などを手にしている私は、「四分隊の『ぼん』」と呼ばれていた。四分隊というのは私の所属している第四中隊四分隊のこと。『ぼん』というのは、関西地方などという「ぼんぼん」、あるいは「ぼんち」というような意味であつたと思うが、刑務所なれのしている多くの囚人たちのあいだでいつももたもたし、へまなことがばかりやつている「ぼんやり」というような意味も、ふくまれていたのではないかと思う。

さて、私は、この春島での物語をはじめのだが、私たちが春島に送られてゆく船のなかのことから、話をはじめたいと思っている。

船の女

「この船のなかに、女が乗っている」

横浜を出港して、三、四日たったころ、みんながそういって、さわぎだしていた。

海軍御用船平洋丸は、一万トンちいかなり大きい貨客船で、長いマストのある船体は、ブリッジのうえまで、灰色のペンキで塗りつぶされていた。船のなかには、全国各地の刑務所から移送されてきて、横浜に集結し、南方の島に労役のためにおくられてゆく、私たち五百名余の囚人と、それを引率してゆく六十名ほどの看守たちとが乗っていた（そのとき、まだ私たちは、行先の島の名まえをおしえられていなかった）太平洋戦争がはじまってまだまがないころ、一九四二年の三月下旬であった。

私たちの「船室」は、看守たちの船室のある「一階」の廊下の一隅から、箱をとりのぞいたエレベーターの通路のようなどころを、長い鉄のハシゴをつたわって垂直におりてゆく、いわば地下三階といったような一ばん船底の船倉のなかだった。船の油やペンキのにおいがぶんぶんし、スクリューの回転する音が、すぐちかくできこえていた。百坪以上はある広い船倉のなかに、麻袋や木箱にはいった積荷が、二メートルぐらいの厚さでぎっしりとつめこまれ、その上に荒むしろをしいて、私たちの座席はつくられていた。私たちはそこへ、横浜刑務所か

ら敷と掛と各一枚ずつ支給されて背負ってきた色のあせた青木綿のうすい夏ブトンをしき、それにくるまって横になったり、すわったりしていたのだ。

船倉の周囲は鉄板の壁で窓がないので、真っ暗だった。長い鉄のハシゴのうえの天井のフタは、いつも閉まっていた、錠がかかっていた。用便のときや、配食当番が出てゆくときだけ、下から声をかけて、うえで張り番をしている当直看守にあけてもらうのだ。天井に一つだけともっている裸電球が、黒ぐろとした船倉の鉄板の壁や、そこにつめこまれている青い囚衣の五百名余の囚人たちの姿を、ぼうつと照らしだして、それは壮観——というよりも、凄愴な感じであった。

船倉のなかには、通風口がぜんぜんないので空気は濁り、人いきれでむっとした。みんな頭痛がし、つぎつぎとゲイゲイやった。船は南へ南へと針路をとっているののでしだいに暑さが加わってくる。硫黄島沖をすぎるころには、もうみんな雲助みたいに裸になり、フンドシひとつ、手拭いで汗どめの鉢巻をして、まるで蒸し風呂にはいっているようだった。

そんな私たちは、夕方の三十分間だけ、「運動」時間

があり、甲板に出ることをゆるされていた。私たちは夕方になると、先を争って鉄のハシゴをはいあがり、そこだけ拳闘のリングのようにロップの張られている、もう暗くなりかかっている夕暮れの後甲板のうえを、（横浜を出港いらい風呂にもはいらず、顔もそっていなかった）、たいていのものは汚れた鬘むじやな顔で）右に左に、あるいはおなじ場所をぐるぐると歩きまわるのだった。

そんなある日、向こうの上甲板のうえに出ている女たちの群を、みんなはみつけたのだった。南方のおなじ島におくれてゆく、海軍の慰安婦たちだった。彼女たちは『特志看護婦』という名まえで呼ばれていた。

つぎの日に運動にでたとき、私もその女たちの姿を見た。彼女たちはぜんぶで十二、三人で、上甲板のてすりにもたれて、暮れてゆく黒潮の海をながめていた。海に向かつて、タバコをふかしている女もいた。日本の本土の女性たちはたいいていモンペをはいていたところで、白い膚をみせたゆかたやワンピースという夏物の服装が、男ばかりの灰色の御用船のなかでいかにも場ちがいな――そして、まばゆい感じであった。みんな二十代の半ばを

こえていると思われる年齢の女たちであったが、一人だけ十七、八歳ぐらいの「少女」が混じっていた。髪をおさげにして、愛くるしい顔をした、白いワンピースの少女であった。

「みどりイッ……」

紺のゆかたを着た一人の女が、かん高い（しかし、いくぶんしゃがれたような）声をあげて、少女を呼んでいた。

「なにイ、おねエさアーん……」

少女もすこし離れたところから、大きな声をあげた。よくとおる声であった。その声にくぐんまりがあるように思った。少女は、女たちのあいだで一番年齢も若く、みんなから愛され、人気ものになっているふうで、一人ではしゃぎ喜々として（じっさい、そんなふうに無邪気にみえたのだ）上甲板のうえを歩きまわっていた。

私たちは、そんな女たちの姿を、かなり離れた後甲板のほうから、ながめていた。それがたとえどのような女たちであったとしても、もう何年も社会から離れ、刑務所のなかでくらしてきている囚人たちにとっては、實在の女を目のまえにみるということだけで、感激であったの

だ。それに彼女たちのおかれている境遇に、なんとなく仲間のような親近感をいだき、私たちは親愛の情をこめて、それを遠くからながめていたといつてよい。

夕方の三十分の運動時間は、私たちにとって、いっそうの楽しい時間となった。船倉のなかでは裸であった私たちは、夕方になると青い囚衣のモモヒキをはいて、いそいそと長い鉄のハンゴをのぼった。

私たちが運動で後甲板に出てゆくと、そのおなじ時間に、彼女たちもたいてい上甲板に姿をみせていた。その時間がおなじように運動時間（？）となっていたのか、あるいは彼女たちのほうでも、おなじ南方の島におくられてゆく青衣の囚人たちの群に、なんとなく興味をもつて出てきていたのかもしれないのだ。

「みどりイッ……」

だれかが大声で、前日の紺のゆかたの女の声を重ねて、こちら側から叫んだ。

上甲板のほうでざわめいていた女たちは、一しゅん、おし黙り、一せいにこちら側をみた。それから、みどりと呼ばれている少女が、いくぶんおどけたような表情で、

「なにイッ、おにイさアーン……」

と、大声をあげた。

こちら側から、どっと歓声があがった。

「こらアッ、静かにしろオッ」

運動に立ちあっていた看守たちがどなったが、だれもそれをきいてはいなかった。

いわば、私たちと彼女たちとの交渉（？）といえば、それだけのことであったが、私たちのころは、急になにかあたたかいものにつつまれて、何日もの苦しい長い航海や、暗い船倉のなかでの憂うつも、いちどに消えてゆく思いであった。

船が南にすすむにしたがい、船倉のなかの暑さはますますひどくなってきた。それにサイパン島沖をすぎるころから、波が荒らくなっていた。そんなある日、女たちの一人が海に投身自殺をした。女たちのうちの何人かは、これから送られてゆく南方の島でのほんとうの仕事の内容を知らされず、だまされてつれてこられたのだということだった。投身自殺の原因もそのことと関係があったようである。それはさいしょ、「みどりが死んだ」というふうに、船倉の私たちにつたわってきたが、死んだの